



【写真左】井手橋（「柳河明証図会」）  
【写真上】享保4（1719）年「両役控」

## 城下町の港 ～沖端と出橋～

柳川古文書館 白石直樹

海に直接面していなかった城下町柳川には、物資を集散する河港として沖端（いでのほし）と出橋（いではし）（両岸）がありました。沖端は現在でも沖端漁港があるので想像が付きやすいと思いますが、江戸時代、出橋の下流には橋が架かっていなかったため、出橋付近まで沖端川を船が遡上していたのです。「柳河明証図会」の「井手橋」の挿絵（写真）には、出橋付近に船が碇泊し、両岸の材木町、本船津町などにさまざまな物資が積み下ろされている様子が描かれています。次に、江戸時代中期の「両役控」という史料（写真）で、城下町の港としての沖端と出橋の関係を見てみましょう。

享保3（1718）年当時、沖端町の間屋権右衛門は縁故を通じて「あば脇津」（現長崎市網場と思われる）という所から船を沖端に廻着させ、多くの船で沖端は大変にぎわったようです。しかし、出橋に廻着するはずの船まで沖端に招き入れたので、同年11月に出橋側が藩に訴え、権右衛門は沖端町の間屋を解任されてしまいます。すると、権右衛門の縁を頼って廻着していた船は沖端に入らなくなり、沖端の商人や棒手振り（商品を天秤棒に担いで売る商人）たちは商品が不足して困っていると翌年3月に藩に訴え出ます。

訴えを受けた藩では、家老や町奉行を中心に詮議が進められます。詮議の中では、沖端への船の廻着

数が減少したことと、間物（干魚や塩魚のこと）の価格が上昇したことの関連などが取り調べられたようです。藩は、「あば脇津」からの船が沖端に入らなくなったことにより、出橋から肥前（現長崎県・佐賀県）に間物などを買い付けに行かねばならず、船の運賃などが上乗せされて価格が上昇したのではないかと考えました。しかし、15年以上前には出橋から大勢が肥前へ買い付けに行っていたものの次第に少なくなり、近年ではほとんど買い付けに行っておらず、権右衛門が問屋を解任されてから再び買い付けに行く者が増えたという事実もなかったようです。町奉行は、権右衛門の跡に空席となっている沖端町問屋を新たに任命すれば、出橋との間で価格競争が起これり、物価が下落するのではないかとこの意見を家老へ申し述べています。

12月6日、藩は裁定を下し、権右衛門の縁故による「あば脇津」からの船は以降も沖端に廻着するようにすること、また船の総廻着数については沖端町別当と出橋問屋との話し合いにより出橋が3分の2、沖端が3分の1となるよう命じています。

この一件から、沖端と出橋はともに城下町の港として競合関係にあったことがわかります。また、江戸中期に限って言えば、城下町の港としては沖端より出橋の方が優位であると藩に認識とされていたことがうかがえます。

## ガンバル 我ら 地域おこし協力隊

No.50

大都市圏から地方へ人の流れを作り、将来の定住を目指しながら、地方の活性化への貢献を目指すプログラム「地域おこし協力隊」。彼らの日々の活動を紹介します。  
【問】市観光課観光推進係 (☎77・8563)

▶段ボールの甲冑作りを楽しんだ夏の「水郷柳川ゆるり旅」



皆さん、こんにちは。地域おこし協力隊の千原です。昨年11月に柳川に赴任し、冬はこたつ舟、春はさげもんめぐり、夏はひまわり園を堪能するなど柳川の四季に触れ、気がつけば、おにぎへの秋を迎えています。昨年引き続き、「立花宗茂と閻千代」NHK大河ドラマ招致活動の業務を中心に行っています。ゴールデンウィークには博多どんたくで大河招致の幟旗を掲げてのパレード参加や宗茂公の甲冑の着付け、街中でのリーフレット配布を行いました。その他、4月に市民会館で開催された「本郷和人トークショー」なせ今、立花宗茂なのかとや、7月に行われたタマホームスタジアム筑後での大河招致PR、各イベント会場でのオリジナルグッズ販売なども併せて行いました。

8月には、柳川の小学生に少しでも「立花宗茂と閻千代」に興味を持ってもらうため、毎年春・夏・秋と開催している「水郷柳川ゆるり旅」の中で、段ボールの甲冑作りとチャンバラを楽しんだ。柳川へ赴任して間もなく2年目に入ります。これまでに公私ともども柳川でさまざまな出会いがあり、そのご縁に学びを頂いています。そんなご縁を大切に「定住」という目標へ向け、一歩ずつでも進んでいきたいと思っています。

## 「立花宗茂と閻千代」NHK大河ドラマ招致に奔走



千原 久美子 (46歳)

【プロフィール】福岡市から移住。旅行サイトのライターとして活躍し、韓国語を勉強中。「地域資源の物語を紡ぐ柳川プロモーション事業」担当。平成29年11月から地域おこし協力隊として観光課に所属